

| | |
|------------------|---|
| Title | 韓国におけるメソジスト教会の受容と成長(1) |
| Author(s) | 高, 萬松 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 5-8 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2428 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

韓国におけるメソジスト教会の受容と成長（1）

高 萬松

韓国プロテスタント教会の主流は長老教会であるが、日本においても韓国メソジスト教会（韓国では「監理教会」と呼ばれている）より長老教会の方がより知られているのではないと思われる。しかし韓国でメソジスト教会は信徒数から言えば二番目に大きな教団である。本稿では紙面の関係上、最初のメソジスト宣教師の入国から1910年代までの期間に絞り、韓国メソジスト教会を受容と発展という面において考察したいと思う。

1 メソジスト教会の受容

米国北メソジスト教会は以下のように朝鮮〔以下、「韓国」と混用する〕に伝来した。1882年5月22日に朝鮮とアメリカが「朝米修好通商条約」を締結したため、アメリカは1883年4月に全権公使フート(Lucius H. Foote)を朝鮮に派遣した。フートは当時日本に亡命していた尹致昊(ユンチホ、韓国人最初のメソジスト教会の信徒)を通訳として採用し、朝鮮の国王と会った。朝鮮からは1883年6月に、閔泳翊(ミンヨンイク)、兪吉濬(ユギルジュン)ら11人の使節団がアメリカに派遣された。彼らはサンフランシスコに到着し、そこから1883年7月にワシントンに向かう途中、列車の中でメソジスト教会のガウチャー(John F. Goucher, 1845-1922)牧師と遭った¹。韓国人と米国北メソジスト教徒との最初の接触であった。ガウチャーは閔泳翊一行との対話において韓国宣教の可能性を打診し、メソジスト教会海外宣教部に手紙を出した。韓国宣教を促す内容であった。ガウチャーは青山学院の母体であった神学校と礼拝堂の建設のために巨額の寄付をした人であり、彼は日本に滞在していた宣教師マクレイ(Robert Samuel Maclay)に朝鮮の訪問を命じた。

マクレイの「韓国のキリスト教の受容」という題の論文には詳しい内容が記されているが、ここではその一部だけ紹介しよう。彼は中国に滞在していた頃から韓国への宣教に関心を持っていた。彼

は1882年に日本宣教師に任命され、1884年に〔東京の〕英和学校の校長を勤めていた。その時、ガウチャーから次のような手紙を受けた。「1883年11月6日に私〔ガウチャー〕は宣教委員会に、もし彼らが隠遁の国である韓国にまで宣教の働きを広げることができ、また日本宣教師部の監督の下で韓国に宣教するならば、…私〔ガウチャー〕はその仕事のために2,000ドルを寄付します」、「あなた〔マクレイ〕は韓国に行ってその地を調査し、宣教師部を設置する時間がありますか。もしそれが可能とならば、我々は異教徒の地に最初のプロテスタント教会を建てる者となるでしょう」²。その手紙を受けたマクレイは1884年6月19日に朝鮮を訪問し、王からキリスト教の学校と病院設立の許可を得た。王からの許可は、彼の言葉によれば「神の祝福」³であり、その背後には金玉均(キムオッキュン:彼が日本滞在中、マクレイ夫妻と交流があった)の努力も多大であった。日本に帰って来たマクレイはメソジスト教会の教理問答の韓国語への翻訳を李樹廷(リスジョン、1842-1886、英語ではRijuteiと知られている)に依頼した⁴。その李樹廷は既にマルコによる福音書をハンゲルに翻訳していて、その結果、最初の宣教師達は李樹廷の翻訳した『マルコの福音書』と『メソジスト教会教理問答』を携えて朝鮮に入国した。最初のメソジスト教会宣教師達は3人、アペンゼラー(Henry Gerhard Appenzeller, 1858-1902)、スクラントン(William B. Scranton, 1856-1922)、そしてスクラントンの母、メアリー・スクラントン(Mary F. Scranton, 1832-1909)である。彼らが宣教地である朝鮮に入国する前に、東京のマクレイの家で宣教のための会議を開いたことも付記しておきたい。

一方、米国南メソジスト教会は尹致昊の(1864-1945)呼びかけによって朝鮮に伝来した⁵。尹致昊は、韓国人として最初に外国に留学した者の一人であり、最初に西欧の言語を学んだ者の一人であった。彼は1881年(17歳)に日本に渡り、同人社で日

本語を、横浜のオランダ領事館で英語を学んだ。開化派の金玉均が1884年に殺害され、命の危険を感じた彼は上海に亡命した。1885年1月26日に上海に到着した彼は、米国南メソジスト教会宣教師が経営し、マクレイとも関連のある中西学院(Anglo-Chinese College)に入学して学ぶことが出来た。その後、彼はヴァンダビルト大学神学部を卒業し(1891.6.17)、エモリー大学も卒業したが、牧師にはならなかった。しかし、彼は朝鮮政府の教育部次官に任命されるほど、教会においても、国家においても指導的立場に立った人である(注5-1)。1887年3月に尹致昊は「回心」し、米国南メソジスト教会からの最初の洗礼者となる。異教徒としての生活を清算し、「自分自身のために、また兄弟達のために有益な生を生きる」⁶という決心もする。さらにそのような志は民族の救いに発展する。1893年3月14日に彼はエモリー大学の総長、カンドラ(Warren A. Candler)宛てに朝鮮の宣教を訴え、また1895年8月19日にヘンドリックス(E.A.Hendrix)監督に朝鮮の訪問を要請する。そのような呼びかけによって米国南メソジスト教会のヘンドリックス監督と中国駐在宣教師リード(Clarence Frederick Reid)が1895年10月13日に朝鮮を訪問する。その結果1896年8月14日に、リードが米国南メソジスト教会からの最初の韓国宣教師に任命され、上海からソウルに到着し、1897年5月に韓国宣教師が組織されたのである。

米国北メソジスト教会宣教師アベンゼラーの入国(1885年)から約10年経って米国南メソジスト教会の宣教師達が朝鮮に入った。1900年代に入ると米国の南・北メソジスト教会が朝鮮においては連合し、そして長老教会とメソジスト教会の150人の宣教師達が1905年9月15日に集まって「在韓福音主義宣教師統合公義会」(The General of Evangelical Missions in Korea)を組織した。このような動きは、現今の教派分裂の激しい現状とは異なるものと言える。

2 メソジスト教会の成長と発展

米国北メソジスト教会宣教師、3人の働きの特徴がある。アベンゼラーはスイス改革派教会の信仰的遺産の持ち主であり、1876年10月1日に長老教会の集会でフルトン(Fulton)の説教によって「回心」した。が、彼は大学時代にメソジスト教会に転じ、1882年にその教派の神学校を卒業し、1884年に韓国宣教師と任命された。彼は教会と学校を設立し、聖書の翻訳にも長老教会のアンダウッド(H.G.Underwood)と共に主導的に働いた。アベンゼラーは1887年10月9日に最初の夕拝を「ベテル礼拝堂」(Bethel Chapel)という小さな家で始めた。これは長老教会のアンダウッドがセムナン教会を設立した2週間後のことで、韓国で三番目の教会となる。特記すべきは、そこの最初のメンバー7人のうち、二人の日本人(ハヤガヤ(Hayagaya)とスギバシ(Sugibasi))の名前が記録されており、また最初の洗礼者も日本人であった。こういふことで彼は日本人伝道に期待していた(1887年4月11日の日記)⁷。その「ベテル礼拝堂」は、10年後の1897年に「貞洞第一監理教会」という名で最初のメソジスト教会の礼拝堂となる。また、彼の設立した「培材学堂」というキリスト教学校は政府から認められた学校で、その看板は王から賜ったものである。後述のように、メソジスト教会の設立した学校には大勢の青年達が集まっていて、政治的運動に発展する傾向も見られた。一方、スクラントン(William B. Scranton, 1856-1922)はイェール大学、ニューヨーク医科大学を卒業した医者である。彼は闘病生活中に宣教師として献身し、米国北メソジスト教会海外宣教師部から医療宣教師として韓国に派遣された。彼は最初にメソジスト教会医療院を開設したが、後に教会を開拓し、韓国でのメソジスト教会の基礎を築いた。彼の母、メアリー・スクラントン(Mary F. Scranton, 1832-1909)は、彼女の父ベントン牧師の影響で海外宣教に関心を持った人で、彼女は「梨花学堂」(現、梨花女子大

学の前身)を設立し女性教育に貢献した。以上のように始まった米国北メソジスト教会は、1900年に3,897人、1905年に7,796人、1909年に23,243人の規模に成長した⁸。

米国北メソジスト教会宣教師達が宣教活動を始めた頃、朝鮮はキリスト教に対して排他的であった。宣教師達も医療と教育を前面に出した。しかし、10年後、米国南メソジスト教会の宣教師達が入国した時には、キリスト教に対する態度が多少開放的となった。その結果、宣教師達は入国後すぐ伝道ができた。南メソジスト教会は当初、中国宣教年会の一部であったが、1897年に「朝鮮宣教部」と独立し、ソウル近郊を伝道の拠点とした。なぜなら、ソウルは米国北メソジスト教会の宣教拠点となっていたからである。1897年5月、伝道は京畿道高陽という地から始まったが、後には全国規模に拡大された。すなわち、1901年10月の統計で宣教師8人、信徒は899人という規模で⁹、1900年から1904年まで朝鮮を三つの区域に分けて宣教し、信徒の数は1908年に6,181人、そして1909年には23人の宣教師、7,587人の信徒を確保した¹⁰。

3 思想的特徴

アベンゼラーも、草創期の他の宣教師達と同様に教会と民族を同一視した。すなわち、教会は民族の置かれていた状況を傍観したのではなく、共感と同情を持って参与した。当時の言葉で言えば「忠君愛国」思想に満ちていたかも知れない。例えば1896年の初め、「培材学堂」の学生達は、一時的にロシア公館に退避していた国王が宮殿に戻る日に、たくさんの花を道に敷き詰めて歓迎した。同年11月21日には、政治的傾向のある「独立門」¹¹という象徴的建築物の起工式があった。それはキリスト教式で挙行され、アベンゼラーが祈りの順序を担当したこともある。当時の社会的雰囲気によって、草創期の宣教師達は忠君愛国的思想を拒否できなかったと思われる。しかし、アベンゼラーの場合、国王や国法より、神と神の法を優先した

と見てよい。

一方、同じメソジスト教会においてもハルバート(Homer Bezaleel Hulbert, 1863-1949)は政治に深く関与した。代表的なのは、彼が高宗の親書をルーズベルトに伝えようとしたことが挙げられる。それはアメリカが韓国の独立維持のため周旋してくれるように訴える内容であった¹²。また同教派所属の「尙洞(サンドン)教会」は政治的傾向が濃厚であった。その教会は1910年の信徒数が1700人で、ソウルのメソジスト教会で最大の規模であった。ハーグで万国平和大会が開かれ高宗は密使を派遣するが、そのメンバーの内に同教会の青年がいた。無論ハルバートがその背後にいた。その教会で「青年学院」という学校が設立されると、李承晩(後の大統領)が初代校長となり、民族運動の拠点となる¹³。次のような伊藤博文の言葉は、当時、教会における政治参与の憂慮から出た言葉と受け止められる。すなわち、彼が当時日本と朝鮮メソジスト教会の監督であったハリスと親密になって、「政治上一切の事件は不肖之れに任らんも、今後朝鮮に於ける精神的方面の啓蒙教化に関して派、冀くは貴下等其任に当られよ、斯くてこそ朝鮮人民誘導の事業は初めて完きを得べし」¹⁴と述べた。伊藤博文は朝鮮のキリスト教会に対して強い反感を持っていたと思われる。彼は1907年に英国のセシル卿と会った時に、「日本で最大の危険な存在は朝鮮のキリスト教である。…朝鮮での基督教と日本は共存できない。どちらかの一方が無くならない」¹⁵と述べたことがある。その2年後に暗殺されたが、伊藤が朝鮮の「平壤にある日本メソヂスト教会の教会堂建設の際には金一万円を寄付」¹⁶したという目的は何であったのであろうか。

1 ガウチャーは、日本の神学校と礼拝堂の設立にも巨額を寄付した(青山学院編『青山学院九十年の歩み』青山学院、昭和39年、9頁。

2 R.S.Maclay, "Korea's Permit to Christianity", *The*

- Missionary Review of The World*, Vol. 9, No. 8, 1895, 287.
- 3 R.S.Maclay, "Commencement of the Korea Methodist Episcopal Mission", *The Gospel in all Lands*, Nov. 1896, 501.
- 4 *Ibid.*, 500.
- 5 Hyung-Chan Kim, "Yun Chi-ho in America: The Training of a Korean Patriot in the South, 1888-1893", *Korea Journal*, Vol. 1, No. 1 (Sept. 1961) 23.
- 5 - 1 彼はまた韓国の国歌も作詞した。
- 6 *Ibid.*, 24. 洗礼を受ける前に、中西学院のボンネル (W.B.Bonnel) 教授に提出した彼の信仰の宣言文は韓国の教会史において意義のある文書として知られている。ここでその一部を紹介したい。〈付録〉を参照されたい。
- 7 アベンゼラーの1887年10月11日の日記、李萬烈編『アベンゼラー』延世大学校出版部、2007年、309頁。
- 8 柳東植『韓国監理教会の歴史 I』kmc、1994年、238頁。
- 9 同上書、144頁。
- 10 同上書、250頁。
- 11 朝鮮の独立を内外に宣布した象徴的建築物で、中国からの使節を向かえた「迎恩門」を壊してその地に建てられた。
- 12 Cf. F.A.McKenzie, *Korea's Fight fo Freedom*, BiblioBazaar, 2006, 74-6.
- 13 柳東植、前掲書、231頁。
- 14 朝鮮総督府『朝鮮の統治と基督教』京城印刷所、大正十年、6頁。
- 15 Paget Wilkes, *Missionary Joys in Japan, Or, Leaves from My Journal*, Horney Press, 2008, 142.
- 16 朝鮮総督府、前掲書。

〈付録〉

「私の過去と現在」(*What I Was and What I am*)

私が上海に来る前までは神様について聞いたことがありませんでした。その理由は(1)私が異教徒の国で生まれ、(2)異教徒の社会で成長し、(3)異教徒の文字を教えられていたからです。私はキリスト教の福音を知った後にも以前と同様に罪を犯しました。なぜなら、(1)まじめで高潔な生活よりも感覚的な喜びを好み、(2)短い人生においては可能な限り楽しむべきであると理解し、(3)完全な人には医者が要らないと考えたからでした。すなわち、私はまるで自らに義があるかのように、自分の義しさに満足していました。私が義しいと思えば思う

ほど私の品位はさらに落ちていきました。(中略)私は以下のことを望み洗礼を受けたいと願います。(1)私が持っている時間とタラントを、それが一タラントであれ五タラントであれ、それを用いて宗教の知識と信仰を向上させ、そして、神の御心に従い、私自身と私の兄弟達のために有益な生を送りたいと思います。(2)私は、多くの人々がするように、死に直面する際に新たな救いを探し求める必要がないことでしょう。(3)したがって、過去の私とは異なった人間として認識され、行く道が判らず彷徨うときに誘惑に陥ることのないように願っています。私は神が愛であり、キリストが救い主であることを信じます。この世に関する預言が文字通り成就したならば、到来する世界に関する預言も成就されると信じます。尹致昊 中西学院 1887年3月23日。

(こう・まんそん 聖学院大学総合研究所助教)